

---

# 演劇IFストーリー 星空と約束

きらきら星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

演劇IFストーリー 星空と約束

### 【Nコード】

N0700D

### 【作者名】

きらきら星

### 【あらすじ】

長い入院生活を強いられる凜のもとに彼氏の拓馬が一日だけの外泊許可を持って現われた。

## （前書き）

本編『演劇団長は道化師さん』のもしもIFストーリーです。

本編とはまったく関係はないとも言えませんがとりあえずありません。

このお話を読んで凜と拓馬の関係を勘違いしないでください。

小さな白い部屋

小さな部屋の中の小さなベッドの上

白い壁に四角い外の世界

この小さな部屋が私の世界

私は一日が終わるまでずっと滴が落ちてゆくのをじっと見ているだけ

私はこの滴に生かされている。去年も一昨年もそのずっと前からずっとずっと

あと何年生かされるのだろう。10年？5年？3日？

別にどうでもいいや

つまらない。こんな生き方なら生きていたくない。

そういえば今日のお昼にはプリンが出たな……

あつ、今ので一万滴めだ。そろそろ拓馬がくるかな。

「凜、元気にしてるか」

「元気ならこんな所にいるわけ無いでしょ」

「おうおう、元気だな」

拓馬は土曜日の三時に来てくれる。拓馬は……彼氏かな

拓馬は私に外の世界の話をしてくれる。外で流行っていることや最近あったこと

私の中ではずっと前に止まってしまった世界を少しだけ動かしてくれる。

「今日は何の話をしてくれるのかしら」

「ふふふ、今日は話じゃないぞ。俺に感謝しな」

拓馬が自信ありげに一枚の紙を見せつけた。

これは！見たことある。年に二、三回しか見たことないけど

「外泊許可が出たぞ」

「本当に本物なの、拓馬が書いたんじゃないよね」

「ばーか、そんなことできるか」

「でもでも、どうして。お正月でもないのに」

「最近調子がいいからって一日だけ許可してもらえたんだ」

7月のなんでもない日。突然起きた出来事に興奮が収まらない。

ここ何年分かの喜びを全て集めたような出来事だ。

「それで凜、どこに行きたい」

「どこって？」

「遊園地とかショッピングとかあるだろ行きたい所」

そんなこと言われてもいきなりの出来事だ。行きたい所なんてわからない。

それも外のことはよく知らない。

でも、行きたい所はすぐに浮かんだ。

「どこでもいいよね」

「ああ、どこでもいいぞ」

「それなら……」

「で、どうして学校なんだ」

「いいじゃない。せっかく制服買ったんだし一度着てみたかったの」

初めて着た高校の制服。実を言うと私はここの高校の生徒ではない。

それどころか中学もちゃんと卒業していない。

私の制服はまだ新しくしわ一つ無い。同じ歳の拓馬の制服はボロボロなのに

「それもこんな遅くに」

「しょうがないじゃない。私ここの生徒じゃないんだから」

外はもう夜。人気の無い校内を私達はたとぼとぼと歩いていくだけ。

それでも楽しい。

沢山の靴箱、バラバラに並んでいる机、汚れた黒板、ここは学校なんだ。

病院とは違ってここはあの小さな世界の何倍も早く時間が流れているような感じがする。

そして何より。

彼の腕を強く抱きしめながら彼の顔を見上げた。

「どうしたんだよ」

「なんでもない」

となりには拓馬がいる。

校内を一通り回った私たちは屋上に出た。

目の前には街の明かりが広がっていた。

病院の窓からとは違う目の前に広く広がっていた。

その上には星空。街の光よりは小さな世界に見えたけど私は星の方が好き。

「凜、そろそろ帰ろうか」

「嫌、絶対に嫌。今日はここで寝る」

だって、帰ったら拓馬と一緒にいられないもん。

「たく、しょうがないな」

冷たいコンクリートの上に二人ならなんで座って星空を見ている。

「ありがとうね拓馬」

「なにが」

「今日付き合ってもらって」

「なに言ってるんだよ。付き合ってるんだからあたりまえだろ」

「そっか……そうだよ」

拓馬は優しい。ずっとずっと拓馬の側にいたい。離れたくない。でも……

「拓馬、私……あと何年生きられるのかな」

「さあな、わかんねえ」

「そっだよ」

私にすら分らないのに拓馬にわかるはずがない。

ただ私は拓馬に励ましてもらいたかったのかもしれない。

あの生かされている毎日を耐え抜くための何かを拓馬に貰いたかったのかもしれない。

「ああ、わかんねえ。来年か来月か今週か分からない」

「そうだよな。いつか分からないんだよね。ごめん、変なこと聞いて」

「でもよ。いつ終わかわからないなら精一杯楽しんで笑って生きてやればいいじゃないか」

「え」

「それでも少しでも生きていたいなら星に願ってみるか」

「星に？」

星空は少し曇り空。だけど、綺麗な星が見える。

「7月7日、願い事の一つでも聞いてくれるかもしれないぞ」

そっか、今日は七夕だったんだ。

お星様少しでも長く拓馬と一緒にいられるようにしてください。

そう心の中で願いながら拓馬の肩に頭を乗せた。

「あと3分で7月8日だな。そうなれば俺達は18歳になるんだよな」

そう、7月8日は俺達二人の誕生日。

『あのね。18歳になったら結婚しようね』『ああ、約束だ』

小さな子供の頃の約束を未だに覚えている。

馬鹿だよな俺。子供の頃の馬鹿げた約束を守るために必死になつてさ。

必死になってこんなもんまで買つてさ

「おい、凜」

「んん、すうー拓馬……」

「寝ちまったか」

俺は黙って凜の左手の薬指に指輪をはめた。

「凜、好きだ」

「やべ、寝ちまったか」

朝の肌寒さで目覚めた俺は凜の気持ちよさそうに寝ている顔を見てほっとした。

「おい、凜起きろよ。帰るぞ」

「……………」

「おい、凜」

「……………」

頬を突いてみたが反応が無い。嫌な予感しか頭を過ぎらない。

「凜……………」

俺達の初めてのキスは冷たかった。

「工藤君、これ。凜のポケットに入っていたの」

凜の葬式の日。凜の母親から凜からの手紙を貰った。

本当なら俺がここにいること自体凜の親は許さないだろう。

凜に無理をさせてしまったのだから。

俺が病院から出さなければ凜はもつと生きていられたのかもしれないのだから。

凜の手紙にはこう書かれていた。

『拓馬ありがとうね。指輪すごく嬉しかったよ。本当は自分の声で伝えたかったけど拓馬寝

ちゃってるんだもんね。駄目じゃない、起きてなきや。

実を言つとね。私の寿命三年前に終わっているって言われていたんだよね。

可笑しいよね。私まだ生きてるって……………」

拓馬のおかげなんだよ。プリンの日には拓馬絶対に来てくれたか



ら……

拓馬の顔を見るたびに約束を思い出してさ。笑っちゃうよね。

拓馬が子供の頃の約束覚えている訳無いよね。

でもね、その約束のおかげで私は今日まで生きてこられた。ありがとう、拓馬。

この指輪があれば私、もう少し頑張れると思うから……

もう少しだけ頑張れるからまた来年も一緒に星空を見てくれますか？』

## （後書き）

最後まで読んでいただいております。ありがとうございました。

もしこれを読んでから本編を読んで『キャラ違うし』とか『出てないし』というツツコミを頂けたら幸いです。

感想、評価、ほかのEFストーリーの要望なんでもOKなので何かありましたらお便りください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0700d/>

---

演劇IFストーリー 星空と約束

2010年10月28日03時36分発行